

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 『教育博物館案内』にみる博物館教育思想について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-19 キーワード (Ja): 『教育博物館案内』, 田中不二磨, デイヴィッド・マレー, 手島精一, 博物館教育思想 キーワード (En): 作成者: 宇治, 清美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000312">https://doi.org/10.57529/0002000312</a>

# 『教育博物館案内』にみる 博物館教育思想について

宇治清美

## 論文要旨

『きょういくはくぶつかんあんない教育博物館案内』は、1877年（明治10）に開館した教育博物館の展示資料と解説が記されたもので、1881年に刊行された。その内容から、教育博物館設立と資料収集に関わったたなかふじまる田中不二磨や日本国学監のデイヴィッド・マレー、そしてマレーとともにフィラデルフィア万国博覧会に派遣され、のちに当該博物館館長を務めたてじませいち手島精一らの設立理念が深く反映していることが判明した。

本稿において『教育博物館案内』には、手島らのはくぶつかんきょういくしろう博物館教育思想および博物館教育の方法としての展示における思想や技術が記載されている点を明らかにした。

本稿は『教育博物館案内』の内容を精査し、ここに示された博物館教育思想について言及するものである。

キーワード：きょういくはくぶつかんあんない『教育博物館案内』 たなかふじまる田中不二磨 デイヴィッド・マレー  
てじませいち手島精一 はくぶつかんきょういくしろう博物館教育思想

## はじめに

博物館展示の歴史において、筆者はこれまで1888年（明治21）の岡倉天心の「博物館に就て」<sup>(1)</sup>が展示に関する考えを述べた初期のものであると捉えてきた。岡倉は、陳列の目的を「後進ヲ奨道スルハ必須」と述べ、その方法として絵画を例に挙げ具体的に述べている。その後、展示思想としての進展を見せているのは、1904年、前田不二三の「學の展覽會か物の展覽會か」<sup>(2)</sup>の論述である。前田は、展覽会を情的展覽会と智的展覽会に区別し、美術品の展覽会を情的展覽会、學術の展覽会を智的展覽会であるとした。青木豊<sup>(3)</sup>は、前田不二三について「博物館展示の命題に関する理論構築の萌芽」と位置づけている。

明治期の博物館展示思想に関する研究史として、邊見端<sup>(4)</sup>は1889年に坪井正五郎がパリ万国博覧会を見学し、展示への厳しい評価を記した「パリー通信」について、坪井が配列の重要性を指摘している箇所に対して「当時の日本に在って、これは正に卓見と言う

べきであろう」とし、『パリー通信』の中で取り上げられた内容は、決して現在に比し遜色あるものでない。今尚、銘ずべき事柄である」と述べている。加藤有次<sup>(5)</sup>は、坪井について邊見の論稿を引用しながら「明治期における博物館学の礎ともいえることであり卓見ともいえる」と評価し「ただし博物館学としての理論に及ばず、Museography のみにとどまったと考えられる。」と述べている。

これらの文献より以前の1881年に刊行された『教育博物館案内』は、先行研究において文献紹介や博物館学史、博物館資料の観点などから論じられているが、その背景には特に教育博物館を調査した手島精一の考えが反映されていることがある。

本稿では、教育博物館の設立をめぐる状況や手島精一について、そして『教育博物館案内』にみられる展示の状況を検討し、その博物館教育思想を考察する。そこでまず、博物館教育における展示についての概念を述べておく。展示にはその前提となる展示思想が必要であり、これは博物館や展示のあり方に対する考えを示す。その下に展示するための意図<sup>(6)</sup>があり、実践する手段として配列の方法などの展示技術が位置する。『教育博物館案内』は、教育を目的とする博物館の展示に対する解説であると同時に展示の意図および実践が記されている点に注目し、『同案内』の展示思想論としての位置づけを確認するとともに、そこに示された博物館教育思想について述べていきたい。

## 1. 教育博物館の設立について

『教育博物館案内』が刊行された背景にある明治政府の教育制度の変遷、および教育博物館設立の経緯について述べていく。

### (1) 近代教育制度の変遷

1871年（明治4）、廃藩置県後、間もなく文部省が設置され、翌1872年に「学制」が公布された。学制は明治新政府が教育改革を実施するために、初めて定めた近代学校制度である。学制の条文は、その多くが学校制度の体系を示し、行政組織をつくるための条章であった。学区制による小学、中学、大学の設置計画においては、これらが全国一斉に設置されたのではなく、まず小学校の開設が急速に進められ、3、4年の間に26,000ほどの小学校が設置された。文部省は、学制の実施にあたって着手の順序を定めている。まず小学校に力を注ぎ、整備した上で中学校等を充実させようとした。また、小学校と関連して、その教員養成を急務として師範学校の設立も重視した。

学制実施期において、主として文教行政にあっていたのは文部大輔田中不二麿であった。田中は日本の近代教育制度に重要な役割を果たしたデイヴィッド・マレーと協力し、

学制実施の経験を基に教育制度を改善し、1879年に「学制」を廃止して「教育令」を公布した。教育令は中央統轄による教育を改め、教育行政の一部を地方に委任するものであった。しかし、当時の自由民権運動などの思想と相俟って自由教育令との世評が広まったことや、地方によっては小学校の廃校、就学率の低下を招いたこともあり、田中は司法卿に転じた。翌1880年に教育令は改正され、府知事・県令の権限や文部省の行政力、および学校の設置や就学についての規程が強化された。こうして1882年ごろまでには、教育令改正による全国教育の改善は一区切りがたった。

小学校教育に関しては、学科目や教育の要旨、教科書名が教則をもって指示された。教科書は、学制頒布とともに文部省が編集を始め取り急ぎ刊行した。教科書を教授する方法は師範学校において試みられ、米国人で師範学校教師のスコットは学級編制による一斉教授を行った。この方法は各地の小学校の校舎が整うとともに全国に普及していった。また、米国から伝えられた実物教授や問答教授の方法をとり生徒の自律活動を尊重するペスタロッチー教育法が主唱された。しかしながら、これによって小学校の教育方法を改めるまでには至らなかった。

1881年、「小学校教則綱領」が公布された。これは学制当時の教則を根本から改め、教科目を定めて学科課程の基本事項を示したものである。小学校初等科では修身・読書・習字・算術・体操を科目とし、中等科においては初等科科目のほか、地理・歴史・博物・物理・裁縫などを加えた。これらは、その後の小学校の教科目と教育内容を編成する基本となった。<sup>(7)</sup>

このように文部省による教育改革がすすみ教育制度が変遷していく状況のなか、教育博物館は設立されるのである。

## (2) 教育博物館の設立

1871年、湯島聖堂内に文部省博物局の観覧場として「博物館」が設立された。翌1872年には「文部省博物館」として文部省博覧会を開催したが、翌1873年、この施設は博物局、書籍館、小石川薬園等とともに太政官所轄の博覧会事務局に併合された。文部省は、教育の近代化をすすめるなかで、実物標本による教育のための施設として文部省が所轄する博物館が必要であると考えた。そこで、博覧会事務局に併合されたかつての「文部省博物館」を返還してもらうための上申を繰り返した結果、1875年に文部省に復帰することとなった。その名称を「東京博物館」としたが、実際のところは標本を所有しない名前だけの博物館であった。<sup>(8)</sup>

1876年4月末、田中不二麿やデイヴィッド・マレーの一行はフィラデルフィア万国博覧会へ出発した。<sup>(9)</sup> 文部省からの派遣団は、田中をはじめ総勢5名であり、その内の一



図1 フィラデルフィア万国博覧会における日本パビリオン<sup>(10)</sup>

人にのちに教育博物館館長となる手島精一がいた。田中らと共に米国人のマレーが文部省から派遣されたのは、博覧会への参加を機に書籍館、博物館に備えるための書物や物品、器具の収集のためであった。フィラデルフィア万国博覧会の展示は、鉱業・冶金、製造、教育・科学などの部門がまとめられた中心館、および芸術、機械、農業、園芸の各部門の館において行われた。教育関係の展示内容は、教育の制度・統計、幼児教育から高等教育までの各段階、女子教育、技術教育、盲聾啞教育、学校建築、教具、図書館、博物館など学校教育と社会教育におよぶものであった。派遣団は博覧会場の出展準備のほか展示物を通じた各国の教育事情の調査、米国とカナダの教育視察、あわせて開催された教育の国際会議への出席などの活動を行った。<sup>(11)</sup>

同年6月10日に学術博物館（場）設置が決定する。学術博物館（場）とは、かつての東京博物館の収蔵品が数多くなり、スペースが狭くなった上にアメリカで収集した物品なども送られてくるために新たに拡張、新築した施設である。田中の留守中であり、代わって文部省行政事務を預かる九鬼隆一がこれにあたった。

翌1877年1月、田中らが帰国する。それから間もない1月末、東京博物館は教育博物館と改称される。教育博物館は3月28日に竣工し、8月18日、開館した。<sup>(12)</sup>

田中は「教育瑣談」において、フィラデルフィア万国博覧会に関しては、「萬國教育家

大會には毎回出席して、各國諸大家の論説を聴くの好機に接し、<sup>(13)</sup>と記し、またトロントの教育博物館を見学したことについては次のように述べている。

其實際を觀察せしに、秩序整備し、規模亦壯大にして、各種教育の論説、學校管理の方法、校舎の設計圖案、諸般の標本、教科書、器具、諸生徒事業成績より、幼稚園兒童の遊戯品、玩具等に至るまで、苟も教育に關せる須用の事物は、最大網羅せざるは無く、一度其内に入るや、百般の研究、參考に資すべく、甲乙の良否亦指願の間に選擇するを得べし。因つて予は此舉を賛し、遂に費府博覽會に出陳せる彼我の物品を互に交換するを約したりき。(中略) 歸朝後、東京博物館の規模を更め、十年一大新館を上野公園内に築造し、其竣工するや茲に移り、廣く教育上の公益を圖るを目的として、教育博物館と稱し、殊に教育者の研究に供し、又洽く公衆の縦覽に便せり。<sup>(14)</sup>

これらのことから、フィラデルフィア万国博覽會とトロントの教育博物館訪問の経験が、日本におけるその後の教育博物館の設立と運営に与えた影響の大きさをうかがい知ることができる。

こうした経緯の後1877年、田中とマレーの構想によって推進された「教育博物館」が上野公園内に設立されたのである。教育博物館は一般に、教育制度の改良と教育の普及のために、主として教育上の諸道具を収集して展示する施設とされている。教育博物館の運用を規定する『教育博物館規則』は、前文と12カ条からなり、前文で教育博物館は「教育上必需ナル内外諸般ノ物品ヲ蒐集シ教育ニ従事スル者ノ搜討ニ便シ兼テ公衆ノ來觀ニ供シ以テ世益ヲ謀ランカ為メ設立スル所」と設立目的を記している。そして、第一条で「本館ニ蒐集スル物品ハ教育上ニ關スル書籍器械及ヒ學校模型其他動植物金石ノ類」とし、教育博物館は第一に教育関係者のために教育上の参考資料を収集し展示する専門博物館であることをうたっている。<sup>(15)</sup>

田中不二麿は、教育博物館の開館に際して次のように演説した。

教育一切ノ物品ヲ排置シ其得失ヲ比較シ博ク世人ノ選用ニ供スルハ是教育博物館設立ノ主義ナリ蓋教育多般ノ事業ヲ舉テ親シク之ヲ實際ニ施爲スルハ固ヨリ政府ノ本意ニアラス但世人ノ模倣演繹スヘキ中外各様ノ標本ヲ公示シ以テ指點開引ノ具トナシ各自ノ需要ニ隨ヒ左右ニ取テ其源ニ逢フノ地ヲ爲スニ過サルノミ故ニ其標本トナスヘキモノハ精粗ヲ問ハス細大ヲ論セス一場ノ下ニ臚列シ遍ク世人ノ搜討ニ便セントス果シテ能ク世人ノ此館ニ就テ其標本ノ良否ヲ查覈シ之ヲ實施ニ試ミ文運隆旺ノ功ヲ呈シ愈教育ノ眞價アルヲ證スルニ至ラハ此館ヲ稱シテ社會ノ光輝ヲ收藏スルー大寶庫ト謂フモ亦可ナラスヤ<sup>(16)</sup>

ここで述べられているのは、教育博物館設立の目的および社会や教育における教育博物

館の有用性である。

一方、田中とともに教育博物館を構想したデイヴィッド・マレーは、米国ラトガース大学の数学と天文学の教授であった。文部省の学監として来日し、それから5年半にわたって、文部大輔の田中不二麿を補佐した。日本におけるマレーの業績としては、教育博物館のほか、東京大学、東京学士会院などの創設に対する協力が挙げられる。そして、マレーはこの間に日本の教育に関する7通の報告書を作成した。<sup>(17)</sup>

この内、1873年の「学監米人博士 ダウキッド、モルレー申報」は、母国語での教育、欧州諸般の学科を日本語の教科書に編成すること、教師の育成、女子の教育などについて、また1875年の「学監 ダビッド、モルレー申報」は、学校視察における教室内の教具などについて記している。<sup>(18)</sup> さらにマレーは、帰国後の1877年に2種類の報告書『慕邇矣稟報』および“Report upon Collections made at the Philadelphia Centennial Exhibition”を作成した。<sup>(19)</sup> フィラデルフィア万国博覧会に関する報告書である『慕邇矣稟報』についての詳細は後述する。<sup>(20)</sup>

## 2. 手島精一と教育博物館

手島精一は、1849年（嘉永2）、沼津藩士田邊四友の次男として生まれる。幼少期に同藩士手島右源太の養子となる。1870年（明治3）米国フィラデルフィアのイーストン大学に留学し、この間、岩倉具視一行の通訳として米国各地を視察した。次いで、英国に渡り1874年に帰国、翌1875年には東京開成学校雇、監事となった。1876年、東京開成学校製作学教場事務取締役兼務となり、工業教育に関係する。同年、文部大輔田中不二麿に随同行して、フィラデルフィア万国博覧会に派遣され、出品の事務を担当した。帰国後の1877年、手島は教育博物館において館長矢田部良吉の下に館長補となり、実質的な運営を行った。1878年パリ万国博覧会に文部大書記官九鬼隆一に随同行して渡欧、さらに教育用品を購入するために英国に渡った。翌1879年、箕作秋坪が教育博物館館長に任命され、帰国した手島は再び館長補となり運営に専念した。その後1881年7月6日付で館長に就任した。

手島は東京教育博物館が廃止になる1889年までその経営にあたった。その間には英国の万国衛生博覧会において教育用品を入手し、内国勸業博覧会では審査官を務め、また東京職工学校（現東京工業大学）の設立にも尽力した。<sup>(21)</sup>

教育博物館の資料は、教育博物館が設立される前年1876年のフィラデルフィア万国博覧会を機に、手島やマレーらによって収集されている。この時期は、田中不二麿やマレーによって日本の教育制度が米国を範としていたこともあり、資料収集は米国を対象として

行っていた。その後、館長補であり実質的な運営者であった手島によって、1878年の渡欧の際からは欧州諸国の資料に転じていった。その背景には、米国製は金具を使用していたことに対して、日本で模造する点において、木製が多い欧州製の方が適していたこと、また経費も低廉であったことがある。<sup>(22)</sup>

1877年の開館時の展示品は、フィラデルフィア万国博覧会の時に入手した教育用品、教育博物館設立以前の東京博物館時代に収集した各種資料、開館4カ月前から各府県を通じて収集した教育用品などであった。その後、1881年までに展示室は1階第1室から第7室、2階第8室から第13室と区分され、列品分類目録や案内書を刊行する運びとなった。また、館長手島の工業教育重視の方針もあり、農工商等の実業教育に関する資料の収集に努めた結果、それらの展示室を増築することとし、1883年に竣工した。<sup>(23)</sup> なお、展示資料数は、1881年の時点で教育用品が5,055点、金石学標本3,755点、植物学標本1,981点、動物学標本8,194点、その他別室の展示資料845点、合計19,830点であった。<sup>(24)</sup>

### 3. 『教育博物館案内』と博物館教育思想

1878年（明治11）、手島は教育用品購入のために英国に渡る際に、九鬼隆一への書簡に以下のように記している。

世に、設立せる所の博物館を、要するに、美術・古物・博物学・医学等、専門学科の博物館にして、其排列品は高尚のものたりと雖も、其關涉する所は、各種の學術に止り僅かに、専門學者に裨益あるのみ。而して、教育博物館は、之と異り、各種の學術に入る基礎を立つるの物品、即ち、父母の家庭に用ふる教育品、幼稚及び小中學用教育品、及び、教育家參考物品等を、排列する所にして、其物品は、高尚ならずと雖も、其關涉する所は、極めて、大、且つ、博くして、一般人民に利益あらん爲め、設立せるものなり。之を譬ふるに、各種の博物館は、猶ほ専門学科の如く、教育博物館は普通学科の如し。故に、教育博物館の事業は啻に、教育品を排置するに止まらず、猶、人民の教育と密着し、能く、實際に涉り、教育具中、其的を護ざるものは、各國所用の教育具中に就て折衷改造し、之を府縣に頒ち、教育を受くるの子女をして、或は簡易に學び得、且つ、厭倦を生ぜざらしめ、又、學校器具及建築の如きも、或は、模作改造し、模範學校を結構して、以て、標準たらしめ、只管、生徒の品行を端正にし、及び、之が健康を保全せしむるに在り。然らば、方今、教育博物館に蒐集せんとするの物品は、其目的、二様あり。一は、公衆の來觀に供し、一は、模造の參考に備へんと、するものたれば、其物品は、務めて、現状の教育に適するものを選び、併せて、

模造の用に供せんとするにあり。然るに、該館の所務、徒らに、高尚に渉る時は、却て、公衆を益すること少きが如く、又、教育博物館設立の主旨に、悖るに似たり。今や、精一、教育備品を購求せん爲、英國に赴かんとするに當り、聊か、卑見を、陳す。教育備品購求概目、及、取調の事項等は、別紙に詳具せり。その良否得失は、伏して、貴官の裁可を乞ふ。謹言 明治十一年七月二十八日<sup>(25)</sup>

手島は、「世に、設立せる所の博物館」の展示に関して「其排列品は高尚のものたりと雖も、其關涉する所は、各種の學術に止り僅かに、専門學者に裨益あるのみ。」と述べたのに対し、教育博物館は「一般人民に利益あらん爲め、設立せるものなり」としている。そして、教育博物館の目的は二つあり、一つは公衆の來館に供すこと、もう一つは模造の参考にすることであると述べている。

また、帰国後に記した「教育博物館に関する意見」の各項目は次の通りである。

- ①物品解説目録を編成すること
- ②和漢用書籍目録を編成すること
- ③椅子・卓子の製造
- ④指物教授具の有効性、および博物館排列品に我が国に適するものを選択し模造すること
- ⑤指物用掲図、理化学および博物学用掲図の有用性と製作
- ⑥理化学器械の製作
- ⑦金石学、植物学、動物学標本の必要性和製造

これらに加えて、さらに文部省の判断を求める事項として、次の3項目をあげている。

- ⑧地方への教育普及のため、内国博覧会毎に教育博物館から出品すること
- ⑨教育博物館の職員が地方を巡回し、その実情を熟知すること
- ⑩教育博物館委員の編成<sup>(26)</sup>

文部省は、これらの意見に対して解答をしている。①から⑦までに同意を示し、①については「同意、尚列品ノ例ヲ品名ト共ニ簡單ナル解説ヲ付ケタシ」としている。<sup>(27)</sup>

手島は、上記のように教育博物館の構想をまとめた上で、『教育博物館案内』に関わる部分としては以下のとおりに述べている。

物品解説目録を編成して、物品の施用を解説し、時としては、教授具の得失、及、校舎の建築、椅子卓子の製作、生徒の健全に、利害あるを論じ、又、或は、内外教育家、或は、文部省の、認めて以て、完全の教育具となすものは、其然る所以を述べ、且つ、圖畫を挿入して、務めて、解し易からしむ。

教育博物館は、小中學校に用ふるの物品を排置するに止まらずして、尚之が學科を審かにし、物品の順序を正し、目録を造らざる可らず。<sup>(28)</sup>

これら手島の構想が『教育博物館案内』にどのように反映されているかを4章以降で後述する。

なお、1879年の教育博物館の年報によると、展示の配列が学術上の順序と異なっていたために変更したことが次のように記されている。

陳列順序ノ變更ニ着手シ漸次齊頓セシメントス今其順序ヲ擧クレハ第一金石第二植物第三動物トス而シテ金石ハ結晶雛形及内國ノ礦石外國ノ礦石トシ地質學標品古石化石物品ハ之ヲ別室ニ排置ス植物ハ草木腊葉有用木材等ニシテ動物ハ從來ノ比較解剖室ヲ廢シ其骨格ハ剥製ノモノト並列シ上等動物ニ始リ下等動物ニ終ル鳥類ノ如キハ剥製骨製及ヒ其卵巣ヲ並列スル等凡テ一日ニシテ動物ノ稟賦慣習骨格ノ結構等ヲ瞭然ナラシメントス此ノ如キ陳列法ハ高尚ナル動物學者ニハ或ハ適セサルモノ、如シト雖モ普通學科ヲ修ムル者ニ在テハ蓋シ適當ノ排列法ト謂フヘキナリ<sup>(29)</sup>

ここに実質的に館の運営にあっていた手島の方針が読み取れる。

1881年、手島が館長に就任し、『教育博物館案内』が刊行された年の年報には、手島の考えが以下の通りに記されている。

教育博物館按内動植物目録ヲ編纂セル等ナリ蓋シ本館ノ物品ハ之ヲ一十三室ニ排列シ其次序固ヨリ秩然タリト雖モ夫ノ物品中内外製作ノ區別ナキヲ以テ觀者或ハ之ヲ甄別スルヲ能ハスシテ其本邦製品ノ如キモ洋製ト看做シ遂ニ之カ購求ヲ難カルモノアリ因テ特ニ本邦製ノ教育品ヲ選擇シ之ヲ別室ニ陳列セシヲ以テ大ニ曩者ノ惑ヲ解クヲ得タリ加之其刊行ノ按内目録等ハ列品中較著キモノヲ擧ケテ之ヲ説明セルモノタルヲ以テ通視ノ際物品ト對照スルトキハ一目シテ其要ヲ知ルノ便アリ夫レ然リ而シテ目下技藝教育創起ノ際其指示ニ充ツ可キ標品ニ至リテハ猶ホ未タ闕乏ヲ免カレサルモノアリ故ニ今後ハ内外古今ヲ參酌シ務メテ選擇ヲ精覈ニシ以テ教育家ノ參考ニ資スルハ又已ム可カラサルノ急務ナリ<sup>(30)</sup>

年報の中で、日本製と外国製の教育品を区別して展示している点は、国内にて教育品を模造し普及させたいと考えていたことがわかる。また、『教育博物館案内』は展示室ごと、展示ケースごとに記され、資料には「い、ろ、は」が付されているため、展示品とその説明を対照して見ることが容易である。さらに技芸教育に関する資料収集は急務と述べられており、これら3点を重要視していたことが認められる。

1884年から1888年までの間、教育博物館では学術講義会が実施された。これは「教育博物館規則」第12条の「學科上ノ事理ヲ物品ニ就テ講究シ或ハ器械ノ便否ヲ説明センカ爲ニ有志者ヲ招キ或ハ學士ヲ聘シテ集會ヲナスコトアルヘシ」に基づく事業であった。小・中学校、師範学校の教員等を対象とし、講義科目は、動物学、物理学、化学、数理学、地文

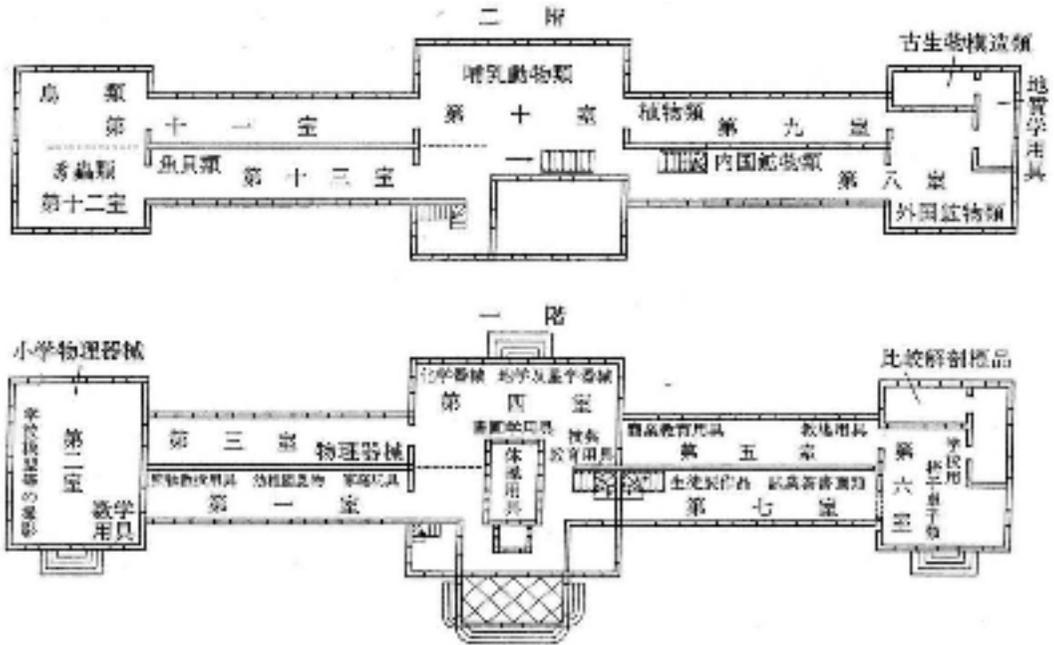


図2 東京教育博物館の展示区分 (1879年) <sup>(32)</sup>

学、植物学、熱学、光学、衛生学、算術教授法、物性論、音響学などにわたる。講義終了後は講師が試問を行い、成績ならびに出席の良好な受講者には館長と講師より「学術講義証明書」が与えられた。学術講義会は教師の再教育としての成果をあげ、東京府からの評価も高いものであった。<sup>(31)</sup>

次いで、こうした博物館教育思想を踏まえた上で、1881年10月に教育博物館から刊行された『教育博物館案内』について見ていきたい。

#### 4. 『教育博物館案内』について

1881年(明治14)10月に教育博物館から刊行された『教育博物館案内』は、上・下巻からなる。上巻は開館時間や来館時の注意事項、緒言、教育博物館前面の図、教育博物館内部の図に続き、第1室から第7室までの記述、下巻は、第8室から第13室までの記述、及び図書館、正誤表となっている。<sup>(33)</sup>

教育博物館の建物は、2階建てである。1階は正面から入って左に回り、時計回りに第1室から第7室までの展示室が配置され、2階は逆に反時計回りに第8室から第13室が並び、強制動線の配置である。<sup>(34)</sup>

『教育博物館案内』の各室の説明は函毎となっており、これが展示ケースを示す。様々

な大きさの函があったことが推察され、函の上の壁面には写真や図表があったとみられる。

当時の教育博物館規則には「第十條 蒐集セシ物品ハ悉ク類別シ之ニ解説ヲ附シタル目録ヲ刊行スヘシ」<sup>(36)</sup>とあり、『教育博物館案内』はこれに基づいたものである。『教育博物館案内』緒言に刊行の目的を以下のように述べている。

其列品たる類を分ち部を畫し秩序殆んと整ふと雖も其名稱と主用とに至ては一見輒く解し難きものあり遂に匆々觀過して只一場の玩弄物を觀るの感を爲すものあるに至る偶其説明を請ふものあるも無数の人衆に夥多の物品を一々説明するか如きは固り勢爲す可からざるの事なり是を以て今其列品中の著きもの若干を擧て其略説を附し教育博物館案内と名け以て觀覽者に便す

此書素と學者の爲めに作れるものに非ず故に其解説の如きも務めて平易を旨とし世俗の人に解し易からんを欲す<sup>(37)</sup>

ここにおいて教育博物館の展示は学者のためではなく、一般の人にわかりやすいことを念頭に置いたものであることが述べられている。

### (1) 『教育博物館案内』に示された展示（配置）と教育の意図

ここでは、教育博物館の展示における資料の配置と教育の意図、思想および展示技術について検討する。まず、表1で各展示室の配置について確認しておく。



図3 『教育博物館案内』(1881年)<sup>(35)</sup>

表1 教育博物館における各展示室の配置<sup>(38)</sup>

展示室	配置
第1室	教育玩具、幼稚園恩物（遊具）、実物教授用標本および掲図、フィラデルフィア万博およびパリ万博への教育品の出品に対する両国からの賞状、昌平坂学問所講堂模型
	【第一函】日本製の切抜画、手形の図、双六、知恵の組木、知恵の環、離合日本図、博物図牌
	【第二函～第五函】外国製の鞆類、蒸気車船の雛形、風琴→組立絵、組立地図、切抜細工→家屋組立木、縫取細工、針画、鋸細工、紙宮細工、線鉄細工、製本道具、風車組立
	【第六函】フレーベルの肖像、幼稚園恩物、英国の動物、植物、金石の示教図、内務省出版の農事図解、小学示教図、独国刊行諸職業図、その他、単語図、博物図
	【第七函】米国製の家庭教育玩具、綴字具など
	【第八函】日本度量衡一組 仏国製度量衡
	【第九函】英国実物教授書にある物品、有用動物の標本、動植物、金石並びに製品、解説書
	【第十函】独国人の選する綿布、麻布、絹布、革、染料等の精製に至るまでの物品、英国製の針、ペン製造過程の標本、昆虫の発育を示す模造品、有用金石、地質学標本
	【第十一函】幻燈
	【数学用具類として】数学用掲図、本邦製珠算、ベルギー人の算術用具、仏国製珠算、分数器
	第2室
【第二函】【学校様式および撮影の部として】託児所遊戯場雛形	
【第三函】【物理器械の部として】独国・英国・東京府下製煉社製の助力器具模式	
【第四函】英国グリピン氏製造の物理器械および、東京府下長田銀造が製造した物理器械	
【第五函】東京府下藤島常明および製煉社がグリピン氏製の物理器械を模造したもの	
【第六函】独国バップ氏が選定した廉価で簡易な物理器械	
理化学器械および物理器械、力学器械など【第二函～第五函】英国グリピン氏製造の物理器械 【第一・八～十三函】米国チャンパーレイン氏、リッチー氏および長田銀造、製煉社等製造の物理器械 【第六・七・十四・十五函】独国ロールヘック製理化学器械 【第四～七函の間】物理器械を製造する器具	
第3室	【第一函】英国アトワード器械
	【第二函】水車、気学器械
	【第三函】波動函、応響器
	【第四函】鉄棍折裂器、インゼンホース導熱比較器、光線屈折器、三稜鏡、透光鏡
	【第五～七函】上述のとおり
	【第八函】求心力、遠心力試験器、水学器械

展示室	配置
	<p>【第九函】 水平管、アルキメデスの理を示す器械、水圧に関する器械、毛細管引力試験器</p> <p>【第十函】 験気器、ポンプ、排気機、気秤、真空鈴、羽毛金銭管、熱学器械など</p> <p>【第十一函】 寒暖計、円体膨張試験器、空気流通試験器、半截蒸気機関模型、電気及び磁気学器械</p> <p>【第十二函】 発電棍、摩擦電気機、電池、電信機様式、磁石鉄、磁石針、電話機、音楽器械など</p> <p>【第十三函】 長田銀造製ブンセン氏の度光器、顕微鏡</p> <p>【第十四函】 揚声筒、光学器械</p> <p>【第十五函】 上述のとおり</p>
第4室	<p>化学器械の部</p> <p>【第一函】 グリピン氏製造の化学器械と薬品、および製煉社が做って製造したもの</p> <p>【第二函】 米国チャンパーレイン氏製造の化学器械</p> <p>【第三函】 グリピン氏製造の化学器械と薬品、ホフマン氏の器械</p> <p>【第四函】 グリピン氏製造の定性分析用器械と薬品</p> <p>星学器械の部</p> <p>【第五函】 米国製の望遠鏡、月球</p> <p>地学用具の部</p> <p>【第三函と第五函との間】 地形名称一覧</p> <p>【第五函の上】 暗号日本地図、日本暗射地図（3点とも教育博物館製造）</p> <p>【第六函】 仏国製の地学用具、黒塗地球儀</p> <p>【第七函】 半截地球儀</p> <p>体操用具類</p> <p>【第四室中画学用具の後方】 亜鈴、棍棒、球竿、ベースボール、蹴鞠など</p> <p>書画学用具類</p> <p>【第八・九函】 欧米各国および本邦諸家の調製、透明盤、木片摸本、形体摸本、摸形写法の臨本、橋梁摸本、遠近法説明具、卓子（板面を自在に起伏できる）、カリフォルニア州夕陽の景色の図、米国リンカーン大統領幼時勤学の図、米国ジョンローシェル氏製の模型など</p> <p>職工学校用具および生徒製品</p> <p>【第十函】 オーストリア人ワイス氏製職業用機械類雛形</p> <p>【第十一函】 アムステルダム職業学校生徒製作品（1878年パリ万博出品物）</p> <p>【第十函前面の壁上】 マサチューセッツ州技芸学校生徒の衣服模様織物下絵など</p> <p>【第五函入口の壁上】 英国レーノルド氏に係る工業機械の図、石炭坑の図、懐中時計機関の図など</p>
第5室	<p>【第一函】 商法学校教授用書籍、帳簿類、東京府商法講習所授業の実況を示す扁額</p> <p>盲啞および痴子教授用具類</p> <p>【第二函】 欧米諸国製の盲聾啞および痴子教授用書器図画、盲啞生徒等の製作品 盲人教授用具として、凸字書、点字書、点字凸起具、黄銅製文字、算盤、地図、盲人教育院生徒製作の織物</p>

展示室	配置
	<p>啞者教授用具として、聴音器、観話法教授牌</p> <p>米国ペンシルバニア州痴児学校の教具類</p> <p>【第三函】 京都府盲啞院の教具類</p> <p>教場用および生徒用諸器具類【本室左側】 黒板類、掲図台類 英国レーノルド氏万国古今沿革図、米国刊行の万国沿革図、英国の学校で用いられている暖炉、学校帳簿</p> <p>【第四・五函】 石盤、五色チョーク、黒板拭き、黒板用コンパス</p> <p>卒業証書類および賞牌類 【第四・五函上壁面】 学士証および卒業証書等</p> <p>【第六函】 英・米国の生徒への賞牌</p> <p>【第七・八函】 椅子、卓子黒板の雛形、英国製裁縫卓子、呼鐘、米国製書籍入れと教育博物館による模造品など</p>
第6室	米、英、仏、露、独、ベルギー製学校用卓子、椅子 比較解剖模造類、仏国オーゾー氏製の精工な標品
第7室	内外国諸学校生徒の書画、作文、試験答案、製作品、裁縫品類
第8室	<p>金石類の部</p> <p>【第一函】 英国ガラス製品形模型、および国内で模造したもの、英国の品形学の書籍および教育博物館製の摸形</p> <p>【第二函】 独国で学校用に選定した品形模型</p> <p>【第三函】 硬度試験石、吹管試験用具、寶石彫形の摸形など 硫黄銅鉱、花崗石、</p> <p>【第一架～第三架の上】 内外国産の金石、石炭、雲母、磁鉄鉱、輝鉛鉱など</p> <p>内国産金石 【第四～十一函】 石墨、硫黄、大理石、石膏、水晶、柘榴石、石綿、輝石、黒曜石、浮石、黄玉石、鶏冠石、石黄、辰砂、錫石、鉄砂、化石類など</p> <p>外国産金石 【第十二～十九函】 金剛石、琥珀、蛋白石、輝石、角閃石、銅玉石、電気石、自然蒼鉛、紅満俺鉱、白金</p> <p>金石学標本類 【第二十函】 学校用金石標本</p> <p>【第二十一函】 英国地質学士の選定した3種標本で1862年ロンドン万博、1867年パリ万博に出品し受賞したもの</p> <p>【第二十二函】 斧、槌、鋏など古代の石具</p> <p>【第二十三～二十五函】 英国地質学士選定の金石、岩石化石標本</p> <p>【第二十六函】 外国産岩石類</p> <p>地質学模造類 【配置場所不明】 各国古代図、地殻直截図、教育博物館が模製した英国北方の地質摸形</p>

展示室	配置
	古生物模造類 <b>【配置場所不明】</b> 欧米諸国の古代生物の化石を模造したもの 考古標品類 <b>【配置場所不明】</b> モースが大森貝塚で発見した骨片、土器の碎片など
第9室	植物の部 この室に陳列する物品は植物類で、示教に用いる掛図ならびに摸形類が多く、実物は木材種子の数種に過ぎない 第一～三函は仏国人オーゾー氏の模造 <b>【第一函】</b> 仏国人オーゾー氏の模造、キアラセイ花・実、丁香花・実、豌豆花・子房・実、キンギョソウ花・実など <b>【第二函】</b> ホクシヤ花・実、小麦の一種の実、桜桃の実、蛇莓の一種の実、菌類模型、掲図など <b>【第三函】</b> 百合の一種の花 <b>【第一架】</b> 日本産の木材標本 <b>【第二架】</b> 小笠原諸島産の木材標本 <b>【第三架】</b> 北米産の木材標本
第10室	動物の部：指肢動物 <b>【第一～八函】</b> 仏国人・日本人の骨骸、インド諸島のオラウータンの骨骸、南米のホエザル、アフリカのライオンの骨格、アフリカのチンパンジー、オナガザル、日本の猿、マダガスカル猿、欧州のハリネズミ、日本のテン、狐、狸、狼、米国のオポッサム、オーストラリアのカンガルー、南米のナマケモノなど 蹄肢動物 <b>【第九～十一函】</b> 南米の猿の骨格、米国の野猪の牙齒、日本産馬の骨格、米国の野牛の骨格、南米のアルパカなど 鱗肢動物 <b>【第十二函】</b> 日本のオットセイの骨格、ジュゴンの骨格、一角魚の歯、米国・日本のアザラシ、日本のアシカなど
第11室	鳥類：棲気禽類 <b>【第一～五函】</b> 鳶、ミミズク、フクロウ、日本のアカケラ、キツツキ、杜鵑、カッコウ、スマトラ島の巨大な鳥類、百舌鳥、ヒバリ、キレンジャク、ヒレンジャク、北海道のミヤマカケス、アオバト、シラコバト、キジバト 棲地禽類 <b>【第六函】</b> ダチョウ 棲水禽類 <b>【第七～十三函】</b> 欧州南部の水鳥、ヘラサギ、朱鷺、クロトキ、ダイサギ、米国の白鳥の骨格、ヒシクイ、マガモ、アホウドリ、カイツブリ、家畜鳥類など
第12室	多虫類：鱗甲多虫類 <b>【第一～三函】</b> 北米のヤマガメの骨格、日本の亀類、日本・米国のスッポンの骨格、大西洋の亀類の骨格、米国の鱈の骨格、日本の蜥蜴、ヤモリ、アフリカの大蛇（毒牙なし）、琉球のハブ、日本のマムシ、米国の毒蛇の骨格など 露膚多虫類 <b>【第四函】</b> アマガエル、米国の蛙、日本のトノサマガエル、米国・日本のヒキガエルなど

展示室	配置
第13室	魚類：硬骨魚類 【第一～五函】日本の鱸、セイゴ、英国人が整頓した脊椎動物の標本、オーストリア人の選定した博物学標本（1878年パリ万博に出品）カナガシラ、ホウボウ、セミホウボウ、ヤガラ、鮭、鱒、タラなど
	軟骨魚類 【第六函】マンボウ、シュモクザメ
	【第12室中央】魚類のアルコール漬け
	【第13室右側】無脊椎動物は未整理

次に、展示内容の要約と技術、意図、思想について検証する。まず第1室の冒頭で、独・英国製の実物教授の掲図は、四季の風景や工匠、人間にとって有用な動物などを指教する上で、幼児の学校には欠かせないものとしており、第一函については、児童の知力を発育するのに適する。本邦の玩具は児童の目を喜ばすのみで教育の助けとなるものが少ない。また、「破壊（こわれ）しやすく、形状（かたち）の実物と大きく異なるため児童に誤解（とりちがい）させる害がある。また有毒性の彩料（えのぐ）を用いるものもあり、実に恐ろしい。製作に従事する者はこれらに注意し、第二函以下に排置（ならべおく）外国製の玩具類を参酌折衷（よきところをとる）する時は必ず善良の玩具を製出すること」などが記されている。玩具類の教育性を述べるほか、ふりがなは読みだけではなく、語意を平易な表現に変えて付しており、製造する者や一般の人々に向けた文章となっている。第二函～第五函では、嬰兒用の極めて簡単な玩具から進んで、成長に従って知能を発育する効果のあるものへ順序立てて陳列するとあり、対象年齢の順にすること、また本邦製と比べて外国製の数が甚だ多いとし、展示法として比較参照させる視点がある。第七函は、綴字を教える際、ただ書籍上のみでは徒に記憶力を労すために倦厭の念を生む。器具を用いることは有益で、授業中に児童の心意をよろこばせる益も少なくないと述べられている。第八函は、物の大小軽重長短の比例などは幼時に習知しなければ、成年の後にはその思考を誤って明確にすることは難しい。実物をもって教育することは知覚の発達への助けとなるばかりではなく、将来の実用上に益があることが少なくないと記されている。実物資料で比較する展示であり、実用上の益に関しては手島の工業教育に対する意識の表れともいえる。

第2室、第六函については、物理器械はヨーロッパ諸国の小学校で用いるものであり、「観覧者は彼の国の小学校においては美しい器械を用いず、且つみだりに高尚にしないことを知るべきである」と記されている。これは、手島が、九鬼隆一に送った明治11年の書簡の中で、教育博物館は「高尚ならずと雖も、其關涉する所は、極めて、大、且つ、博くして、

一般人民に利益あらん爲め、設立せるものなり。」と書いた内容と合致するものである。

第4室、第三函と第五函付近の一覧や地図については、通常の暗射図で教えることを、徒に生徒の暗記力を勞し精神の発達に害なしとせず、この二版の如きものは練習の際に嬉樂を含むのでこの害を免れ、児童を教えるには甚だ適切であると記している。これは、第1室第七函の記憶力を勞す点、児童の心意をよろこばせる点と同様の内容である。また、第4室中画学用具の後方の体操用具類においては、教育の目的はただ児童の知識を発達させるのみではなく、その身体も發育させなければならないとして、体育の重要性を述べている。第八函と第九函では、画学は万物の形体を平面の紙上に模写し、その真形に迫ることを主とするもので極めて有用な一学科である。初学のもののがすぐに実物を模写することは難しいので、最初に直線、曲線、輪郭等を書くことを教え、次に摸形を学ばせ、漸次実物を模写させる。ここに排列する家屋橋梁および日用諸器具類の摸形は、実物模写を練習する臨本であると画学の有用性と教育の方法を記しており、画学は工業教育上における有用性との関連が示されている。

第5室においては、「盲者にして大部の書を著述し、あるいは数学に長じる等自ら思考力に富むものが多く、教育する方法を宜しくすることができれば、たとえ社会有用の人たらざるも自力をもって生を営むに至らしむるか如きは決して難きに非るなり。啞者に教えるに読書算術および職業の端緒をもってその知識を発達し技術を演習させることは教育者の最も緩かすべからざる所なり。脳部機関不完全は、その機関が全く備わっていないことはないが、常人に比すればやや不完全の所があり、たやすく改良するべからざるものなり。機関作用不完全は、その機関は皆全うしと雖も、作用は自在にならないので、漸次誘導すれば殆ど常人に近くさせるに至る」などとして、障害に応じた教育および教具の重要性が述べられている。

第8室の金石類の部では、ここに陳列する物品について、「その性質の大略を識別すれば蓋し玉石混合の患いを免れる」と展示の目的が示される。「第一架～第三架の上は、内外国産の金石類は大塊で函内に陳列するには不便なので、ここに陳列して、その形状物質等の識別に便す。故に學術上の分類には従わず、その重要なものを左に掲げる」と展示の目的と分類について述べられている。古生物模造類については、「古今変遷の一斑を窺うべし。生育した時代によって大別して、第1期、第2期、第3期とし、小別して20有余とし、観覽者に生物変遷の状況を知らせるに便す」と、化石の説明、模造品、分類の基準・方法、展示の意図について記されている。

第9室の植物の部では、「陳列の順序は概ね品位の等級に従うが、その長短大小は相適わず、甚だ体裁の宜しくないものは取捨先後せざるを得ず、秩然とその順序を正すことが

できないものがあることを観覧者は諒せよ」と展示の順序が整わないことを説明している。第二函では、菌類模型について、「オーゾー氏の製に係り、彼国の所産の菌類中、無害にして食すべきものと形は類似するが毒劇烈にして食すべからざるものとを比較し、あるいは初生と成熟とを並列し、これを見てその異同を熟知し施て鑑別し、併せてこの類一般の形状構造を知了させたい」としている。展示法としての比較、並列、展示の意図を記し、その内容は社会教育的要素が強い。第一架では、「日本の木材を収集し、茎幹の標本に供することを目的とする。能く天然の状態を存するものを選び、その傍に枝葉を添え、自然分化の順序に従って陳列する。故にこの学に従事する者は列品について研究すれば必ず思半に過ぐるものがある。そればかりではなく木匠等も木理の精粗、質の堅脆等を熟視考察するときは、適用する所を發明すること蓋し少なからざるべし」として、順序に従って展示していることに加え、博物館としての収集や研究活動への貢献について述べている。

第10室の第九函～第十一函は、「哺乳動物中、蹄肢獸類は日常欠くべからざる最も有用のもので、牛・羊の皮毛、馬・鹿の蹄○（○は不明瞭で判読不可）をもって被服となし座席となし、粧飾となり器具となり、その用は枚挙に遑がない。その中でもとりわけ牛馬の如きはただその死骸に需要があるのみではなく重を担い、遠に馳せ、人間に功用がある」と哺乳類を分類し、社会教育的視点で説明している。

第11室の鳥類では、「ここに排列する鳥類はその営生の状態について大別して3部とする」と展示上の分類の基準を示し、第二函は、杜鵑、カッコウについて、「往々卵を他鳥の巢に産し、その主鳥に体伏を養育させるという。毛虫、羽虫を食餌とするため、農家のために甚だ有益な鳥類である。鳥類が人の世に益のあるところは、直接においては哺乳類に及ばないものありといえども、間接の功はこれに優るものがある。功用の1, 2を挙げれば、第1は諸鳥の卵と肉とは食料に供して甚だ益がある。第2は、羽毛は書画の筆を製し、あるいは綿に代用しあるいは諸器具の装飾となすべく、とりわけ朱鷺の翼毛は漁夫の最も貴重するところである。（中略）第6は唱鳥は概ね昆虫を嗜むので林園田圃の害虫を除去する」など、身近な例を具体的に述べている。

第12室の第三函について、「蛇類は四肢胸骨眼瞼を具えず、且つその中に毒牙を有するものと、これを備えないものとの二種がある。その有無は外貌を觀て、即ち識別することを得べし。毒牙を具えるものは後頭甚だ広闊にして2, 3の種類を除くの外、眼瞳は概ね鉛直である。これを有しないものは後頭ただ僅かに闊いのみで眼瞳は環円なり」と記して、蛇の毒牙の有無を比較させることで深い理解につなげようとしている。第四函では、「日本においてはヒキガエルは大にして蛙は小なれども、米国においてはこれに反し、蛙は大にしてヒキガエルは小なり」と日米の蛙の比較展示について述べている。

## (2) デイヴィッド・マレーからの影響

上記について、教育博物館展示室の分類、および『慕邇矣稟報』の2点から見ていきたい。まずは、13室ある展示室の分類について検討する。

例えば、1871年の大学南校物産局の物産会における分類は、鉱物、植物、動物の門が設けられ、その中に部がある。例を挙げると、鉱物門には、化石之部、土石之部、鉱石之部、元素類があり、植物門には、澳大利産草木、木之部（盆種）、草之部（盆種）、種子果実并木材腊葉之部、海藻之部がある。また、動物門は、活獸之部、剥製、獸骨并画図之部、鳥之部（籠飼、剥製）、魚之部、（活魚、剥製）介之部、虫之部、爬虫之部、植虫之部に分類されている。<sup>(39)</sup> これは、教育博物館展示室が第8室金石類の部、第9室植物の部、第10室動物の部、第11室鳥類、第12室多虫類、第13室魚類と分類されていることに、ある程度一致するものであり当時の博物学の分類項目に相当する内容となっている。

また、教育博物館の資料の収集は、フィラデルフィア万国博覧会を機に行われていることから、この出発前、すでに博物館内部の展示室の構想があったものと推察できる。そして、この時点での名称は「學術博物館（場）」であった。田中不二磨は、1871年に岩倉使節団の一員として派遣され、初等、中等学校、公私立学校、アカデミー、単科大学、盲、聾啞学校などを訪問した。東洋における教育とは異なり、西洋では、倫理とともに国語、文法、歴史、地理、国家間の関係、算数、理科、音楽、美術などの実学的な科目が初等教育のカリキュラムに含まれていることを見聞し、また多くの博物館も見学している。<sup>(40)</sup> 「學術博物館（場）」とした、この時の構想は、これらの田中の岩倉使節団での経験が影響しているものと考えられる。

一方、来日前のマレーは、ラトガス大学の数学と天文学の教授であり、1865年に開校したラトガス大学科学校の設立に中心的な役割を担っていた。この科学校は、旧来の教育課程に独自の専門分野を加えており、例としては、植物学、地質学、化学、鉱物学、物理学、天文学、建設工学などが挙げられ、教育方法は教科書のほか実験や実習を取り入れたものであった。また、天文学の教具として、赤道儀、子午線球体、天文学用時計などの購入について討議している。<sup>(41)</sup>

当時の日本では、1881年に小学校教則綱領が交付され、教科目が定められる過程でもあった。教育博物館における展示に関して、E.S. モースは、教育博物館が教具を展示することを聡明な思いつきであると評価している。ただし、2階の展示については「これは魚を除くと、概して貧弱であった。然し魚は美事に仕上げ、立派な標本になってゐた。」とその状況を具体的に記している。<sup>(42)</sup> 学校教育における庶物指（示）教<sup>(43)</sup> および自然科学分野の導入が、展示室の13室の分類に反映されていることは、手島が教育博物館は學術に

入る基礎を立てるための物品を配列する所と九鬼に宛てた書簡の中で記していることによっても明らかであり、また、それが学術講義会の科目の設定にも影響していると考えられる。

次いで、『慕邇矣稟報』は、デイヴィッド・マレーが文部省からフィラデルフィア万国博覧会に派遣され、教育博物館の資料収集や各国の教育事情の調査などの活動を行って、帰国後の1877年に作成した報告書である。表2は、マレーがフィラデルフィア万国博覧会で購入した資料について、前述した表1に照らし合わせて抜粋したものである。購入資料と教育博物館の展示との関係は、学校関係用品が1・2・4室、不幸な階級の人々が5室、学校用品が1階の展示室、工学関係資料が4室の職工学校用具および生徒製品、金石類8室、ウォールプレートが8・11・13室、植物類9室、動物類が10～13室に納められたと推定される。

その他にマレーから手島への影響が見られるものとして、工学と一般産業を示す石版画、写真、鉄道の写真、機械の写真、また書籍としては法律書一式報告書、製造業と産業に関する書籍一式、貴重な百科事典の新版、新しい学校用書籍、微視的毒物学上の著作などの購入資料があった。

『慕邇矣稟報』には、教育博物館に関して「學校什器ノ最良ナル模範装置ニ備へ並ニ良好ノ學校ニハ缺ク可ラサル學術ニ關セル物品ヲ集メ設ケタル摸形學室ハ之ヲ教育博物館ニ備へ置カハ利益少ナカラサル可ク」<sup>(44)</sup>と記述されており、マレーが教具を備えた摸形学室の展示を教育博物館の目的の一つであると考えていたことがわかる。この報告書は項目ごとに記されており、①学校の事 ②学校什具の事 ③学校用書籍の事 ④教官の事 ⑤工芸教育の事 ⑥薄命人民教育の事 ⑦政府の教育に関係ある事の7項目となっている。

その中の①では、建築、教室内の教具、学校摸形などについて記されている。<sup>(46)</sup>これらは教育博物館の第2室に相当すると考えられる。『慕邇矣稟報』に室内を暖めること、通気、田舎および都府の学校摸形、学校建築の留意事項などが記されているのに対して、『教育博物館案内』には、第2室は学校様式および撮影の部として、小学校様式は村落に適當、都市に適合する目的でそれぞれ本館にて製造したことや、小学校建築図 採光、整温、通気について記されている。②は、机、椅子、教具、摸形学室、教具を国内で製造するための適当な雛形について記している。<sup>(47)</sup>

表2 フィラデルフィア万博における購入資料の一部<sup>(45)</sup>

区分	項目	資料内容
教育一般	学校関係用品	掛図、地球儀などの教育品、学校什器など
	不幸な階級の人々	『米国聾啞年報』の一式、盲人財団や聾学校の報告書、盲人のための報告書と出版物
	学校用品	見本・学校什器、地理図表とリーディングフレーム、学校什器の見本、米国の校舎、他の教育用品のモデル
技術・製造	工学関係資料	工業デザイン学部が製作した一式のデザイン
金石	鉱物	ラベル付され、整理された鉱物一式
	冶金学関連資料	博覧会の政府館に展示された1,000から1,200の冶金学の標本
	地質学関連資料	ニュージャージー州の土地や岩層や産業資源を示す標本
金石・動物	ウォールプレート	鳥・魚の固定式ウォールプレートと小さな鉱物のコレクション
植物	果樹関連資料	果物の石膏模型64点
	果物・花卉の図版など	様々な果物や花などの色付きの石版画のプレート150点
動物	石膏模型	剥製、骨格模型、絶滅動物の石膏模型を200点ほど
	スミソニアン関係資料	魚食動物の石膏模型、骨格模型や数々の標本

凡ソ學校ニ備フヘキモノハ其學校ノ等級ニ應シテ差別ナカルヘカラス乃チ初等學校ニ於テハ口授ヲ以テ教フルニ供スル物譬ヘハ言語ヲ誨ヘ萬物ノ名稱ヲ誨フルカ為メニハ物形圖ヲ要トシ地理學ヲ誨フルカ為メニハ地圖、地球儀等ヲ備フ可ク較ヤ進ミタル學校ニ於テハ以上諸物ノ外、植物、礦物ヲ集メタル箱子、動物ノ雛形、博物學ヲ教フルカ為ニ用フル物形圖若クハ初歩理學化學ノ實試ノ為メニ用フル装置等ヲモ要スルコトコレアリ又其試問ヲ促ス可ク且兼テ學科ノ主件ヲ鮮明ス可キ物品ヲ以テ生徒ヲ圍繞セシムルコトハ生徒ノ耳目ヲ樂マシムルノミナラス大ニ其進歩ヲ補フモノトス

教具について段階を踏んで説明している点は、表1の第1室【第二函～第五函】展示が対象年齢の順に応じていることにもつながり、教具を用いた授業が効果的であると述べている点は、同じく表1の第1室【第七函】および第4室【第三函と第五函との間】の記憶力を労すことなく娯楽をもって教授することができる」と記されているところにも影響していると考えられるのである。

③は各国の書籍を比較し、さらに教官と関連させて、書籍の重要性について次のように述べている。<sup>(48)</sup>

不幸ナルコトニハ多クノ國ニ於テ學校ノ教官ニ斯克マテ信賴スルコト能ハス（中略）學校用書籍モ幾許カ教官ノ力ノ及ハサル所ヲ補フ様ニ編製シテ教官ヲモ教ヘ且須要ナル釋義訓解ヲモ添ヘサレハ叶ハサルコトニ至レリ

教官の力不足は、書籍をもって補うとしている。これは表1第1室【第一函】の説明やふりがなに関する記述と一致するところがあると推測する。

④は、教官と政府との関係とその待遇や師範学校などについて述べている。⑤は工芸教育の事であり、<sup>(49)</sup> その冒頭で「凡ソ教育ノ諸科中費拉特費博覽會ニ於テ尤モ十分ニ鮮示スルヲ得シモノハ則チ工術ニ屬セル一科ナリキ」と述べ、続けて工業における工術の必要性を記している。ここからは、手島の工業教育に対する意識や活動への影響がうかがわれる。また、図画に関しては、「圖畫ノ術ヲ一汎ノ教科中ニ誘入セシメテ成功アリシハ外國ヨリ出セル無數ノ精美ナル見本ヲ以テコレヲ知ルニ足レリ蓋シ圖畫ノ術ハ殆ント百般工作ノ業ヲ教フルカ為メノ基礎タルモノ」と述べている。この記述は第4室【第八函と第九函】の画学の有用性とつながるものである。

⑥の薄命人民教育の事<sup>(50)</sup>は、米国の養護教育の各院を訪れ、次のように述べている。

瞽盲院ノ如キハ書籍、地圖其他教育ヲ助ク可キ物ハ皆凸字凸形ヲ以テコレヲ作り眼目ヲ用キル代リニ手指ヲ用テ之レニ觸レテ學ヒ知ラシム又盲ニシテ且貧ナル者ハ某工作ヲ教ヘテ以テ其生計ニ資セシムル設モコレアリ

また、「聾啞ノ教育」において驚き感心したこととして「指勢成語(サインラングエジユ)」をあげ、また「口唇ヲ用ヒテ語ヲ為スノ方法」「口唇ノ運動ヲ視テコレヲ鮮スル」方法などによって「言聽ヲ失ヒタル厄難ヲ軽減シ殆ント成全ノ人ト並ヒ立ツニ至ルヲ得ル」としている。これらは、表1の第5室に一致する。

⑦は、まず欧米の政府の教育に関係ある事、次いで日本について述べている。<sup>(51)</sup>

政府ノ助ヲ要スルヲ尚ホ多カル可シ(中略)凡民教育ノ制ニハ種々ノ新學科ヲ採用セサルヲ得サレハ然メテハ創興ノ間ニテモ政府ヨリ助ヲ與フルヲ肝要ナル可シ(中略)初等學校ニ於テハ政府ニ於テ須ク學則規表ヲ作りテコレニ與ヘ且ツ適當ナル教官ヲ成育スルノ備ヲ為サ、ル可ラス

ここには、日本の教育において教育博物館に求められる役割が示されているといえる。

以上見てきたように、『慕邇矣稟報』の教育や博物館に対する記述は、『教育博物館案内』にみる展示の状況や意図、思想に関わるところが少なくない。このことは、教育制度の変遷と教育博物館設立の経緯を踏まえることによっても裏付けられるのである。

『慕邇矣稟報』との関連性が想定される『教育博物館案内』の中には、展示の具体と説明がある。そこで表1の内容を検討し、『教育博物館案内』の要点について以下の3つにまとめておきたい。

#### ①教育博物館としての役割に関する記述

『教育博物館案内』緒言にも記されたとおり、一般の人々の理解が得られる内容と表記

方法が採られている。これは1章(2)で前述した教育博物館の設立目的である「世益ヲ謀ラン」に基づくものと考えられる。また、博物館としての役割である収集・研究活動への貢献についても述べられている。これらは、文部省により教育制度が整備されていく状況において教育博物館に求められた役割であったといえる。

## ②教育に対する意識・方針

実物教育の必要性を述べ、社会教育的要素を含む説明は具体的に身近な例を挙げて理解を深めるように工夫されている。また、記憶力を労すばかりではなく楽しみをもって学ぶ教育方法や実業教育の視点、画学の有用性が述べられている。新たな教育方法が提唱され試みられるなか、展示資料や教具類はこれに則したものと見える。

## ③展示の意図および展示技術に関する記述

展示の意図としては、目的や期待される効果の他に分類基準まで明記されている。展示技術については、分類、順序、並列、比較対照などが記されている。これらによって観覧者の深い理解を狙うものであることがわかる。

つまり、教育博物館としての役割の認識、および教育に対する意識・方針を土台として、展示の意図と展示技術が実践されていたのであり、その展示の思想、意図、実践が『教育博物館案内』には具体的に記されているのである。

## まとめ

本稿において『教育博物館案内』から博物館教育思想を探るにあたり、教育博物館の設立とその資料収集に関わった田中不二磨やデイヴィッド・マレー、そしてマレーとともにフィラデルフィア博覧会に派遣され、『教育博物館案内』刊行時の館長であった手島精一を中心に検討した。マレーと手島の間には資料収集と展示に関して相違点がある<sup>(52)</sup>と指摘されているが、二人に共通する点、手島の思想がデイヴィッド・マレーの影響を受けていることは本稿で述べた通りであり、『教育博物館案内』と『慕邇矣稟報』を検討した結果においても、その影響が認められる。

なお、『教育博物館案内』の中には学術的な解説の他に学校教育のみならず、社会教育や工業教育への視点が認められる。執筆者は、真邨典、宮川保全、永井直章、黒澤寛、藤森峯三、杉山文炳、波江元吉であるが、やはり、そこに一貫しているのは館長手島の思想であると考えられる。<sup>(53)</sup>

すなわち、手島の思想とは、教育博物館の設立目的である「一般の人々への利益」が根底にあり、その目的のために学校教育、社会教育、工業教育の観点をもって教育に資する

こと、そして、その実践の手段としての展示があり、さらには『教育博物館案内』や学術講義会があると考えられる。3章で手島の「教育博物館に関する意見」の中に記されている『教育博物館案内』に関わる部分について述べた。そこにある物品解説目録案の中で示された「図画を挿入」すること以外は教育博物館の活動で実現しており、このことから『教育博物館案内』には手島の思想が反映されていることがわかる。遡れば、フィラデルフィア万国博覧会を機に資料を収集した頃から、既に展示室を構想した博物館教育思想があって、これを進展させた結果を『教育博物館案内』にみることができる。

『教育博物館案内』の博物館教育思想は、日本の初等教育を中心とした学校教育、および欧米諸国の学術の影響を背景とした、田中不二磨やデイヴィッド・マレー、手島精一らの教育博物館設立の理念にあると捉えられる。そして『教育博物館案内』には、博物館教育思想の下にこれを具現化するための展示思想・意図・展示技術が記されているのである。

筆者は、『教育博物館案内』から読み取れる「展示思想」とは、博物館や展示のあり方に対する考えを示すものであり、その下に教育的側面による展示の意図があり、配列の方法などの展示技術があると考えられる。『教育博物館案内』には、一貫した博物館についての思想、意図、展示技術が読み解ける。展示理論や展示技術論の論稿が示されているわけではないが、ここには手島らの思想と展示の意図、実践がある。この点において、「はじめに」で前述した本稿における博物館教育思想の概念に当てはめて考えたとき、『教育博物館案内』にはこれに基づいた展示思想が示されており、博物館発達史上最も早い段階における博物館展示思想論と考えるに至った。

## 註

(1) 1888年(明治21)、岡倉天心は「博物館に就て」の中で次のように述べている。

陳列ノ目的ハ(1)時世ヲ示シ(2)名家大家ヲ示シ(3)流派ヲ示シ(4)全体ノ關係ヲ示スノ四目ニシテ陳列場ヲ四區ニ分チ一區一目トシテ後進ヲ奨道スルハ必須ノ目的ナリ次ニ陳列ノ方法ハ(1)裝潢ニシテ掛クヘキカ硝子ニテ蔽フヘキカハ其一種一品ニ付テ議スヘシ繪畫ニ至テハ剝落碎裂ノ患アリテ目下西洋ニテハ彩色料ノミヲ存シ地絹ヲ差替ル方法アレド危険ニシテ且莫大ノ費用要ス(中略)繪畫等ノ掛方ハ人ノ起居ニヨリテ差フモノナリ佛國ニテハ地上五尺ヲ適度トセリ(3)壁色ニテ物品ノ光輝彩料ヲ變スルモノアリ(4)室内ノ光線反射ニヨリテ彩色ノ變換スルハ尤トモ甚ダシ(5)空氣ノ流通不流通ハ物品保存ニ大關係ヲ有スルモノナリ(6)乾濕モ亦大關係アリ(後略)

(2) 1904年、前田不二三は、「學の展覽會か物の展覽會か」の中で東京帝国大学の人類学教室標本展覽会について以下のように述べている。

物の展覧會として案内した時よりも學の展覧會として案内した時の方が比較的にも最も大なる効果がありました。

併しながら展覧會といふものは見せるのが主であつて、講義的説明は主でないとするいふ人があるかも知らぬ。此言を成す人は情的展覧會と智的展覧會との區別を知らないのである。前者は美術品の展覧會で後者は學術の展覧會である。又、斯ういふ人があるかも知らぬ、大なる公衆に向つて到底説明の出来るものでない、と。勿論然うである。併しながら全體の人に説明が出来ないからと云つて手を拱いて止むべきであらうか、否たとへ少人数たりと雖も説明の出来る限りは説明をした方がよいと思ふ。(中略) 人類學の展覧會はどうしても學の展覧會でなければならぬ、と斯う信ずる、

前田は、このように情的展覧會と智的展覧會を區別した上で「學の展覧會」のあり方を示している。それは、「學の展覧會」に説明は不可欠であること、および「配列を横の何にする縦は何にすると云ふことは最も學として目的に適つた事である。」と、配列の重要性についても述べている。

- (3) 青木 豊 1998「博物館展示論研究史(2)」『國學院大學博物館學紀要』第22輯 國學院大學博物館學研究室 p.4 当該部分は以下の通りに記されている。

展示の命題であるところの「ものを見せる」のか、「もので、見せる」のかという点、即ち、博物館展示の命題(以下この点を博物館展示の命題と称する)に逸早く着眼した人物であり(中略)前田の称する「学の展示」とは、言い換えればある一定の思想・史観に基づく展示の必要性を述べたものであり、博物館展示の命題に関する理論構築の萌芽と看取されるものである。(中略)つまり、「ものを見せる」、「ものをして語らしめる」展示であらねばならないと、当該展覧會の実践のなかで結論づけているのである。

- (4) 邊見 端 1985「明治中期の博物館学—坪井正五郎氏の見識—」『東北学院大学博物館学芸員課程報』第2号 東北学院大学文学部史学科加藤研究室 pp.1-2
- (5) 加藤有次 2003『博物館学総論』(POD版) 雄山閣 pp.23-24
- (6) 新井重三 1981「展示概論」『博物館学講座 第7巻 展示と展示法』雄山閣 p.13 新井は、展示の意図とは展示構想であるとした。筆者も同様に認識している。
- (7) 文部科学省 学制百年史(文部科学省 WEB サイト 最終閲覧2022/11/04)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm)
- (8) 椎名仙卓 1977「教育博物館の成立」『博物館学雑誌』第2巻1・2号 全日本博物館学会 pp.43-44
- (9) 石附 実 1986『異文化接触と日本の教育① 教育博物館と明治の子ども』福村出版 p.160
- (10) Thompson, Westcott. 1876 'Centennial Portfolio: A Souvenir of the International Exhibition at Philadelphia', Thomas Hunter, publisher, Philadelphia pp.22-23

ここでは、日本のパビリオンについて、建築が独特で美しく優れていると評価されている。日本の出品品やその反響に関しては、文部省 1876 『米百年期博覧会教育報告巻四』に次のように記されている。(○は判読不可)

日本國教育出品ノ多キ瑞典加奈太二次ク其大略ヲ舉クレハ日本書籍数十部、英和辞書、日本文教育年報、英文教育年報略、英文日本教育史、英文教育表紀類、學校病院ノ寫眞及ヒ繪圖、學校雛形、地圖、學區圖、博物圖、○盤、石盤、筆、墨、椅子、卓子、鳥獸草木ノ見本、地球儀、物理器械、新聞紙數種、生徒ノ英佛語作文、試験答書、習字、圖画ノ類ナリ

また、4章表1のとおり、教育博物館第1室には教育品の出品に対して賞状が展示されている。

- (11) 石附 実 1985「フィラデルフィア博覧会と日本の教育」吉田光邦 編『19世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所 pp.428-436

なお、この時に収集された教育上の参考品は全て教育博物館にもたらされたことは、註25 p.39に記されている。

- (12) 註9に同じ pp.159-165

- (13) 田中不二麻呂 1907「教育瑣談」副島八十六 編『開国五十年史 上巻』(明治百年史叢書 原書房 p.710)

- (14) 註13に同じ pp.738-739

- (15) 国立科学博物館 1977『国立科学博物館百年史』第一法規 pp.61-71

- (16) 1877「教育博物館開業ノ日 文部大輔田中不二麻呂演述スル所アリ今之ヲ採録ス」『教育雑誌』第45号 文部省 pp.30-31 (佐藤秀夫 編 1981 『明治前期文部省刊行誌集成 第7巻 教育雑誌 明治9・10年』 歴史文献 p.448)

- (17) 吉家定夫 1998『日本国学監デイビッド・マレー—その生涯と業績』玉川大学出版部 pp.2-4・p.140  
マレーによる7通の日本の教育に関する報告書は以下のとおり。

①1873年「学監米人博士 ダウキッド、モルレー申報」日本の教育一般について 『文部省第一年報』に収録

②1875年「学監 ダビッド、モルレー申報」長崎、兵庫、大阪、京都への学校視察旅行に関する報告書 『文部省第二年報』に収録

③1877年『慕邇矣稟報』フィラデルフィア万国博覧会に関する報告書。小冊子のかたちで文部省から出版された。

④1877年“Report upon Collections made at the Philadelphia Centennial Exhibition”フィラデルフィア万国博覧会に出席のために渡米した際に購入した教材に関する報告書

⑤「学監考案日本教育法」

⑥「学監考案日本教育法説明書」この2通は日本語に翻訳されて文部省内部資料として使われた。

東書文庫に保管され、のちに『明治文化資料叢書』に収録

⑦ 「學監大辟莫爾矣東京府下公学巡視申報」マレーの東京府の小学校視察報告書。『文部省第6年報』に収録

- (18) 1873「学監米人博士 ダウキッド、モルレー申報」・1875「学監 ダビッド、モルレー申報」  
1927-1930『明治文化全集』第10巻 吉野作造 編 日本評論社 pp.127-138
- (19) 註17に同じ pp.181-185
- (20) 大壁慕邇矣 1877 『慕邇矣稟報』文部省
- (21) 註15に同じ pp.71-76
- (22) 椎名仙卓 1973「教育博物館の資料収集」『博物館研究』日本博物館協会 第45巻2号 pp.33-34
- (23) 註15に同じ pp.97-99
- (24) 註15に同じ p.102
- (25) 手島工業教育資金団 編 1929『手島精一先生傳』手島工業教育資金団 p.58
- (26) 註25に同じ pp.60-66
- (27) 田邊尚雄 1929「東京博物館と故手島精一翁（二）」『明治文化研究』第5巻3号 明治文化研究会 三省堂 p.30
- (28) 註25に同じ pp.60-66
- (29) 教育博物館 1879 「教育博物館年報」『日本帝国文部省年報第七年報』文部省 pp.393-394
- (30) 東京教育博物館 1881 「東京教育博物館年報」『日本帝国文部省年報第九年報』文部省 p.57
- なお、『日本帝国文部省年報第九年報』の目次には書籍館博物館とある。同年より「東京教育博物館」と改称

手島の技芸教育に関する認識については、1897年「技芸学校ノ設置ニ就イテ」の中で、彼にとっての技芸とは農業、商業は含まず、工業上の技芸の事であると述べている。

(文部科学省 WEB サイト 最終閲覧2022/09/09)

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317641.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317641.htm)

- (31) 註15に同じ pp.128-133
- (32) 註15に同じ p.103
- (33) 教育博物館 1881『教育博物館案内 上・下』
- (34) 註15に同じ p.103
- (35) 註15に同じ p.108
- (36) 註15に同じ pp.67-70

なお、明治10年の教育博物館規則は、第10条であるが、明治12年改正時には同文で第9条となっている。

(37) 註33に同じ 緒言

(38) 註33に同じ

なお、第5室の盲聾啞および痴子教授に関しては、山本哲也 2009「日本に於けるしょうがい者教育の黎明と手島精一」『博物館学雑誌』第35巻1号 全日本博物館学会 pp.47-64に詳しい

(39) 東京国立博物館 編 1973 『東京国立博物館百年史』 第一法規出版 pp.28-37

(40) マリーン・メイヨ 著 芳賀 徹・斉藤恵子 訳 1976年「岩倉使節の西洋研究—久米邦武の『米欧回覧実記』を通して—」大久保利謙 編 『岩倉使節の研究』宗高書房 pp.266-268・296-304

(41) 羽田積男 1985「モリル法(1862年)と私立大学の改革—ラトガース大学科学学校の成立をめぐって—」教育史学会紀要編集委員会 林 友春 編『日本の教育史学 教育史学会紀要』第28集 教育史学会 pp.110-130

(42) E.S. モース 著 石川欣一 訳 1929 『日本その日その日』 科学知識普及会 pp.338-339

なお、第8室にはモースが大森貝塚で発見した考古標品類が展示されている。

(43) 註9に同じ p.133

(44) 註20に同じ 10丁裏 - 11丁表

(45) 高田麻美 2011「米国百年期博覧会においてデイヴィッド・マレーが収集した海外の教育資料」『博物館学雑誌』第37巻1号 全日本博物館学会 pp.38-39 より一部抜粋し筆者が作成

(46) 註20に同じ 4丁表 - 8丁裏

(47) 註20に同じ 8丁裏 - 11丁表

(48) 註20に同じ 11丁表 - 14丁裏

(49) 註20に同じ 14丁裏 - 28丁表

(50) 註20に同じ 28丁表 - 31丁表

(51) 註20に同じ 31丁表 - 42丁裏

(52) 椎名仙卓 1988『日本博物館発達史』雄山閣 pp.82-83 および註45 pp.43-47

高田は、教育品の展示について「見本」であると考えていたマレーと「模造すること」を念頭に置いた手島との違いによる展示の変化は1879年の展示内容に現れているとしている。

(53) 註15に同じ p.109

執筆者の担当は、上巻の教育用具類を真邨典、宮川保全、永井直章の3人、下巻の金石類の部を黒澤寛、藤森峯三の2人、植物の部は杉山文炳、動物の部は波江元吉である。